

心の教育についての一考察 (4)

—美しさを求める—

檜 山 フミエ

Education which aims to develop the Mind (Part 4)

—Search for Beauty—

KASHIYAMA Fumie

It has been a long time since the importance of the education focused on the mind was stated. Its aim is that human beings are to lead life humanely. As I discussed the theme of the humane life in the previous issue, I would like to examine "Vegetable Dyes" as a specific method in this issue.

To nurse the mind which is able to sense beauty is one of the ways to the education cultivating the mind. Only humans can appreciate the colors of the plants in nature, and introduce them into their life as arts and crafts, which can make the mind affluent.

Hereby, I would like to report my experiment in the devise of the vegetable dyes with six kinds of plants.

Key Word : Dye Staff of plants, Vegetable Dyes, Arts and Crafts in Life, Sense of Beauty

キーワード: 植物染料, 草木染め, 生活工芸, 美意識

はじめに

心の教育といわれるようになって久しいが, それは何を求めての論議であろうか。人間らしい人間になること, という一言に尽きると思うが, この人間らしい人間になるということの意味がまたひとつではない。

筆者はこれまで心の教育についての概論, そのための方法, 手段について述べてきたが, 本報では更に, 人間の中にある「美」を求める本性よりこの問題について考察する。

1. 芸術と伝統工芸

「美」と聞いてすぐ頭に浮かんでくるのは芸

術・芸術作品であろう。では芸術とは何か。広辞苑には次のように定義している。「技芸と学術。一定の材料・技巧・様式などによる美の創作・表現。造形芸術（彫刻・絵画・建築など）表情芸術（舞踊・演劇など）音響芸術（音楽）言語芸術（詩・小説・戯曲など）。時間芸術と空間芸術に分けることもある¹⁾。」とある。

だがこうした芸術の定義から美を追求し, 創作・表現するには秀でた能力が必要である。ということは誰でもが出来ることではないし, それを理解し, 味わうということも時には困難である。たとえば絵画を例にとれば, 大部分の作品はそれを観て素晴らしい, この色使いはとてもよい, この形・構図はよい, など一般的にわかるという言い方をし, それは観る人に快感を

与える。しかし、よくわかるという絵が芸術的に優れているかどうか判断するのは凡人には難しい。その分野で特別な才能を持つ人が判断・評価をすることが出来る。特に抽象画といわれる絵画はそうであるし、絵画に素養のないものにとってはダリ、マチス、ゴーギャン、ゴッホ、ピカソなどの絵には共感・理解できないものも多い。しかしそれは個人的なことで、一般的にはやはり名画といわれるものには何ともいえない心地よさがあり、感動があり、喜びがある。それは観る人を活気付け、心に安らぎを与えてくれる。だから美術館には人々が集まるのである。

ところでこうした芸術の範疇にも入るが別の表現をするものに、伝統工芸と言われるものがある。これを定義すると「伝統とは先人の経験・制度・思想などその集団・社会の風習となって人々に影響を与えるもの。また、それらを受け伝えること。」「工芸は美術的な工芸生産をつくること。また、その生産品。彫金・焼き物・塗り物・織物など²⁾。」とある。

わが国にもそれぞれの分野で多くの工芸品があり、その技の伝承がなされている。機械文明の発達とともに手工芸がなおざりにされてきたが、現在またそのよさ・素晴らしさが見直され、復興傾向であることは喜ばしいことである。

そこで本報では、染織の分野で心の教育との関連を考察してみる。

2. 伝統工芸としての染織文化

日本には多くの染織文化がある。代表的なものを上げてみると、

北海道地方

優佳良織、アッシ織

東北地方

こぎん刺し、南部裂織、南部菱刺、岩泉南部紬、南部茜染、紫紺染、南部古代型染、岩手ホームスパン、鹿角茜、秋田八丈、秋田畝織、ぜんまい織、米沢織、紅花紬、会津郷からむし織、米琉、白鷹お召し、長井紬、など

関東地方

結城紬、桐生織、秩父銘仙、村山大島紬、黄八丈、黒八丈、鳶八丈、唐棧、江戸小紋、神奈川シルクスクリーン、など

北陸・中部地方

塩沢紬、小千谷紬、縮、越後上布、加賀友禅、郡上紬、有松・鳴海絞り、知多木綿、掛川葛布、佐渡の裂織、牛首紬、能登上布、上田紬、など

近畿地方

丹後縮緬、長浜縮緬、近江上布、秦荘紬、近江木綿、丹後木綿、河内木綿、西陣織、京友禅、京縫い、堺綴通、など

中国・四国地方

弓ヶ浜緋、広瀬緋、倉吉緋、備後緋、伊予緋、阿波正藍染、狩江木綿、土佐紬と緋や藍が目立つ。

九州地方

久留米緋、博多織、佐賀錦、綾の手紬、本場大島紬、それに染織の宝庫沖縄の染織と芭蕉布、読谷山花織、読谷村ミンサー、首里花織、首里紬、ロートン織、花倉織、手縞、紅型、藍型、久米島紬、南風原紬、琉球紬、宮古上布、八重山上布、八重山ミンサー、竹富ミンサー、など

省略したものもあるが、日本の染織文化は非常に豊富である。

この他、現在は伝承者がなく生産されていないものも60種に及ぶ³⁾。いずれにしても染織文化と呼ばれるようにそれは手工芸が基本で、その道に秀でた者は無形文化財技術保持者と呼ばれ現在に至っている。さすがに彼らの手になった作品は逸品で、年数と経験の重さを感じさせられる。

だが筆者がここで取り上げたいのはそうした特別な作品のことではなく、伝承される技である。伝統工芸・染織文化は基本的に自然素材を用いていることである。織物の素材も染料もいにしえの人々の知恵の結集として伝えられた。自然の物が使われたということは、文明・文化の発展で人工的なものが作られたのが後代だと言うことの他に、自然の持つ素晴らしさが人間

を魅了したのではないか。特に染色に関して筆者が興味・関心を持つのはその発色の美しさである。化学染料が開発されて150年になるが、その色の種類からいっても多くあり、扱いも簡単に短時間でその目的を達することができるのに、それでもなお、天然染料にこだわり、染め続けていくのはその美しさの違いによるためである。

3. 生活工芸としての染織

現在、プロフェッショナルとして、あるいはアマチュアとして種々の染織を手がけている人はかなりいる。前述したように伝統工芸はもちろん、生活工芸もそのよさは手作りだということである。多くの時間と手間をかけて作品を作っていくのはなぜなのか。それは手作りのよさによるものである。日本語に” 味わい ” という言葉があるが、この手作りにこそそれがある。手作りにこそそれを手がけた人の心がその作品に表れていて、みる人使う人にその心が感じられ、優しい気持ちにさせられるのは体験するところである。

以下、筆者が実施したものを通してその美しさを味わってみる。

イ) 藍染め

久留米緋は藍染めの代表的な染織であり、伝統工芸のひとつでもある。伝統工芸については前に述べたが、生活工芸としての久留米緋は染料も自然(天然)染料だけではなく、化学染料との併用あるいは化学染料のみの染色がされている。

自然染料としての藍草も世界では50種もあるといわれるが、身近なところでは蓼藍、インド藍、琉球藍、南蛮駒繫、大青などがある。その利用法も伝統的な久留米緋は蓼藍を発酵させてスクモにし、それを建てて染める。だが多くの藍は沈殿法で使用する。藍の含有量としてはインド藍が最も多く、沖縄の八重山地方で栽培されている南蛮駒繫藍はこのインド藍に似ている。

今回、実施した藍染めは蓼藍の生葉染めと乾燥葉染めである。蓼藍は以前は九州地方でも栽

培されていたようだが、現在は大量に栽培されていると聞くことはない。筆者は以前、徳島で栽培されている蓼藍を見て感動したことがあったが、今回はその種子を入手することができたので栽培し、今回の染色に活用した。

染色を比較するには染色物、量など条件を同一にする必要があるが、今回はそれが目的ではなく染色の美しさということであるので、特に条件を同一にしていない。結果は図1の通りである。

生葉染めのブルーは乾燥葉にくらべ緑味がかった。どちらの色相いを好むかは個人によるが、作業工程の点から言えば乾燥葉の方が手間がかからない。なぜなら藍の色素を抽出するために葉を細かくする必要があるが、生葉は刻むという作業があるが、乾燥葉はもむだけで細かく出来るからである。

ロ) 樺の生葉染め

剪定した枝葉を煎じて染液とし、染色したものである。生葉でも落葉でも多少の違いはあるが、このような茶系の色あいである。媒染剤は錫で同浴で染色している。(図2)

ハ) 刈安染め

刈安といってすぐ思い浮かべるのは八丈島の伝統工芸として織られている黄八丈である。この黄色が刈安である。しかし、他の染織と同じく現在は純粋な天然染料で染めるのは限られており、化学染料が目立つ。刈安はイネ科の植物で萱状のものを3センチほどにカットしたものを使用する。媒染剤により色あいが変わってくるが黄～黄茶を呈する。(図3)

ニ) 福木染め

福木は奄美大島や沖縄地方に自生する喬木である。今回は八重山で入手した福木の皮を煎じて染液とし、染色した。黄色の美しい色を呈した。(図4) 以前に奄美大島で街路樹として植えてある木を剪定した枝葉で染色したことがあったが、それはもっとオレンジがかっておりきれいな染色物であった。場所が違くと成分も多少は違うのかと思った。その他、京都で染色に携わっている人の話によると京都ではきれいな黄色に染色しないということである。水の影響も

あると考えられる。

ホ) 玉葱の皮とマリーゴールドの花染め

生活工芸としての身近な天然染料として用いることができる。単独でもよいが両者の割合により、黄色の強い明るい色にする時はマリーゴールドの花を多く用いるとよく、黄茶色を好むときは玉葱の濃色の皮を用いると得られる。使う分量により色の濃さが違うのは当然であるが、いずれの色あいも美しい。(図5)

ヘ) くちなしの実染め

天然染料は植物繊維には直接染まらないものが多いが動物繊維にはよく染まる。くちなしの実実は動物繊維にはもちろん植物繊維にも色はうすくなるが下漬け(前処理)なしに染色できる。図6の通りである。

4. 草木染め

染料を大別すると化学染料と天然染料に分類される。天然染料は人類が生存するようになった中で、種々の体験を通して発達したと思われる。繊維は腐食するので残ることは少ないが、縄文土器の彩色も染色と考えるならば、それは長い時代を経ている。

それに対して化学染料(合成染料)はマラリアの特効薬キニーネの生成実験の中で思いがけず発見されたもので、歴史的にも新しく西暦1851年ロンドンにおいてであった。その後急速に開発が進められ、1940年頃までにドイツを中心に多くの染料が作られ、現在の染色をリードしている。

天然染料は天然に存在するものを用いて染色する材料ということになるが、その大部分に植物を用いるので植物染料あるいは草木染めと呼ばれている。植物以外では石、土、虫、貝類であるが入手し易いことや取り扱いの面からも植物染料は抜群で、私たちに身近な染料である。色のあるものは染料になるといえるが、その植物の色素の成分の構造と被染物のそれと、染付けはよいがその後の色持ちはよいかなどで染料として用いるものは限られてくる。そこに草木染めの面白さと奥の深さがある。

草木染めはその植物の色素を抽出して使うが、抽出方法としては大部分”煎じる”という方法をとる。そして、興味深いのは目で見える植物の色は抽出されて染まる色と必ずしも同じではないということである。たとえば赤い美しい花を見てこの色に染めたいと思っても、煎じて染液を作るやり方では違う色に染まってしまう。筆者も草木染めに興味を持ち始めた頃、山茶花の美しい赤色に魅せられて染めてみたが、染まった色はグレーであった。これは煎じるということでアントシアンという色素が分解し、違う色素に変わるためである。今は研究の結果、抽出剤で赤色に染めることができるようになっていて、花びら染めとかも行われている。

さらに草木染めの難しさと面白さは繊維に染める場合、主成分がセルロースの植物繊維に染まるものは少なく、染める前にたんぱく質化させる必要があること、色素を金属と結合させないと残らないものが大部分であるということである。このため、下漬け、媒染という処理が必要である。媒染のとき媒体となる金属の種類により色あいが違うことも面白さのひとつである。

5. まとめ

いずれにしても私たちが”美しい”と感じるものを見たり聞いたりしたときの心の動きを見てみると、感受性の違いはあるが喜び、安らぎ、活気、幸福感などという味わいがあることではないだろうか。そして、そこから生まれてくるのは自分も含めた人間に対する優しさではないか。

今回その一例として、植物染料を用いての染色をとりあげたが、それは自然のものが持つ美しさがはっきりと感じられると思ったからである。化学染料を使って染色しても確かに美しいし、むしろ鮮やかさという点ではより優れている。しかし、両者から受ける感じは植物染料のほうが快い。理由は自然物は人間に馴染むようにできているといえるし、それと共に手間、暇かけることによる愛情であろう。それは私たちのからだ全体がそのように反応することを体験

することからわかる。それ故、あまりにも人工的なものに囲まれて生きていと不安定で、自然からの安らぎを無意識のうちに求めている。それは自然物が持つやさしさから来ると思う。

前報で自然に親しむことの有益性について論じたが、筆者自身の体験からも特に植物を観察するとき、その美しさ、不思議さに感動する。それは人間の美しさを見出すことにも通じるように思う。相手の中にこの美しさを見出す訓練は絶対に大切だと確信する。そのためにも美に対する感覚を高めて生きたい。

お わ り に

今回、心の教育についての一考察として“美しさを求める”と掲げた理由は、真、善、美そのものである神によって神に似せて創造された人間（旧約聖書 創1:26）は、自身の中に真、善、美を見出した時、本来の人間になることができることを実感するからである。美を

感じる目に見える一例として草木染めの美しさについて報告した。

人間らしい人間になるために美しさを見出していくことは大切なことである。

引 用 文 献

- 1) 新村 出編「広辞苑」第四版 岩波書店 1998年発行
- 2) 山田俊雄・石綿敏雄編「最新国語辞典」角川書店1990年発行
- 3) 朝日新聞社編シリーズ・染織の文化「日本染織地図」1985年発行

参 考 文 献

『染織 α』誌2007年1月号他 染織と生活社
別冊太陽『染めと織りを楽しむ』平凡社2000年
矢部章彦、林雅子共著『染色概論』光生館
1983年

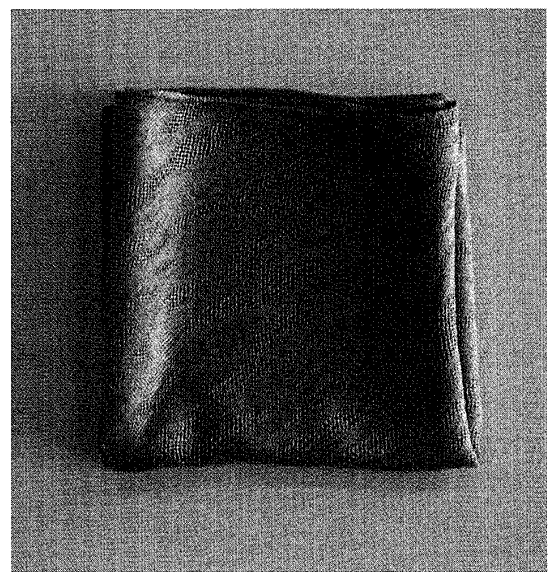
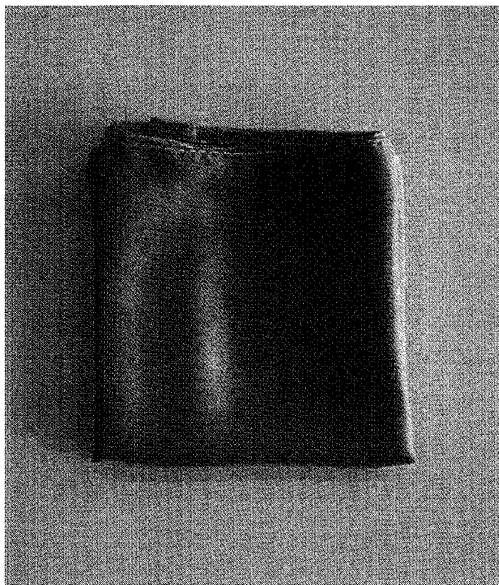


図 1 生葉藍染・乾燥葉藍染

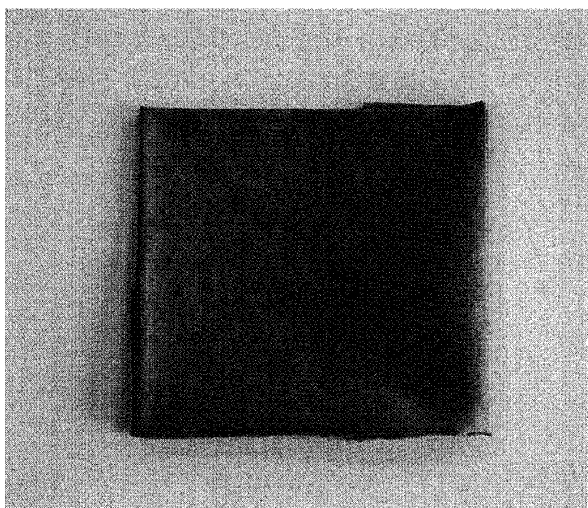


図 2 樺

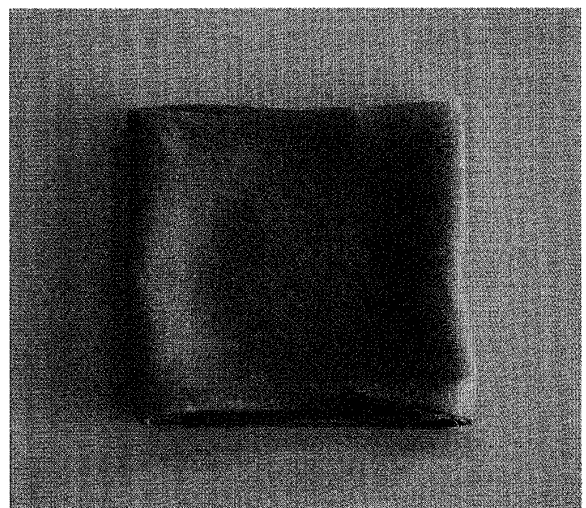


図 3 刈安

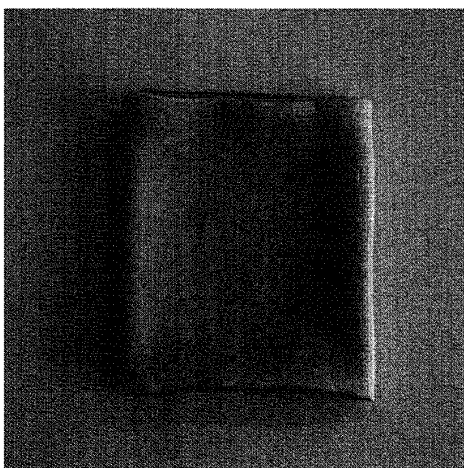


図 4 福木

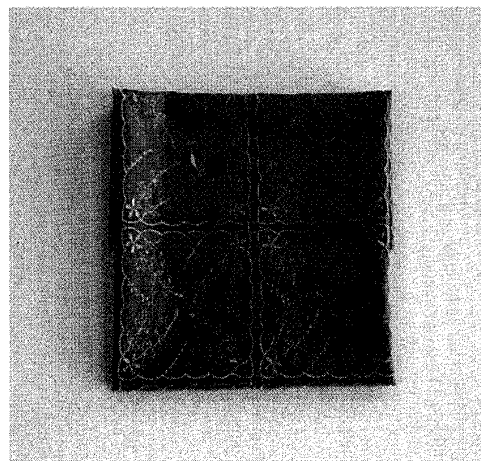


図 5 玉葱の皮とマリーゴールドの花

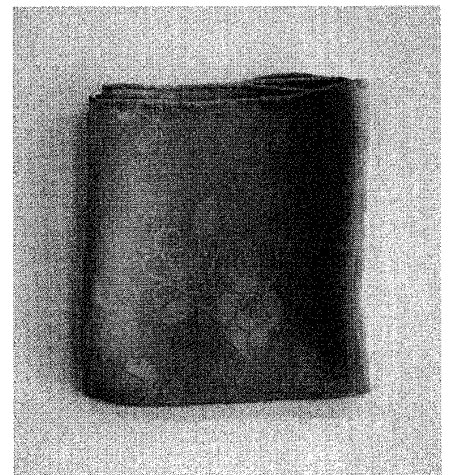


図 6 くちなしの実